

# 神道フォーラム

ISSA : International Shinto Studies Association

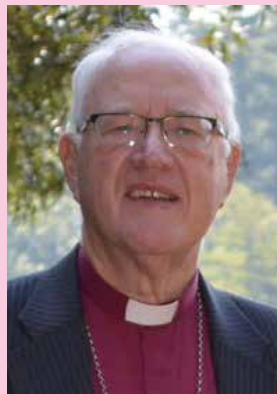
特定非営利活動法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F 電話：03-6805-7729 <http://www.shinto.org>

Vol. 56

神道国際学会会報  
平成30年1月1日号

## 理事兼特別顧問就任 メッセーじ

ジョージ・L・ケアリー卿  
(第103代カンタベリー大主教)



私は、わが良き友である半田晴久博士から、日本の豊かな伝統と哲学的深遠さに根ざして活動する神道国際学会のことを常々伺い、かねてより尊敬の念を抱いておりました。半田博士が設立に尽力された、この重要な学会の理事兼特別顧問に、このたび就任させて頂きますことを、非常な名誉と感じております。

神道の色合い豊かな教えと、文化的影響力に対する理解を促進しようとする同学会の理念は尊いものであり、宗教の違いを問わず模範とすべきものと存じます。対立が激化する今日の世界にあって、神道国際学会が示唆し提唱する教えこそが必要とされています。

神道国際学会に関わることによって、私はこの機関の活動や知識に与るばかりでなく、私自身がかつてカンタベリー大主教を務めた経験、また、長年宗教間対話に携わってきた経験をを通して、貢献を果たしたいと願っています。

私は、この尊ぶべき伝統から学ばせて頂ける機会と、また神道国際学会の活動に貢献出来ます事を、心から楽しみにしております。

## 第17回国際神道シンポジウムを開催 「教派神道の謎と魅力」を探る

本会主催の第17回・国際神道シンポジウムが昨年11月11日、東京・大手町で開かれ、会内外から多数が来場し熱心に聴講した。今回のテーマは「教派神道の謎と魅力」。第1部では、外国人の日本研究者3氏が教派神道について学術的なアプローチを行い、続く第2部では、教派神道教団のトップら3師が現場からの説明を展開した。講演者は次の通り。

第1部(司会・奥野卓司理事(山階鳥類研究所所長)) ①マイケル・パイ会長(マールブルク大学名誉教授)「神道と教派神道を巡って」 ②エイヴリ・モロー氏(東京大学大学院)「教派神道の周縁——天理教と大本の激動の近代」 ③ヘレン・ハーデカ氏(ハーバード大学教授)「教派神道の初期成立過程」。第2部(司会・三宅善信理事長(金光教泉尾教会総長)) ①穴野史生師(神道扶桑教管長)「明治新政府における宗教政策から誕生した神道教派の意味」 ②木村洋行師(天理教深川大教会会長)「天理教の概要と展望」 ③芳村正徳常任理事(神習教教主)「神習教の現状と今後の活動」

「教派神道は神道なのか？」パイ氏

「宗教として認定されたか否かで様々な違い」モロー氏

「講釈師が教派神道の社会受容に大きな役割」ハーデカ氏

開会にあたり三宅理事長は「教派神道というものは、そもそも何なのか。そして教派神道が抱える問題は何か。大いに議論していきたいと思う」と挨拶した。

最初の講演者、パイ氏(本会会長)はまず、神社神道と教派神道の区別は明治になって新政府によって行われたとしたうえで、文献的な翻訳としては教派神道を「Sect Shinto」とせず、教義を重んずるという意味で「Teaching Shinto」とし、

「Shrine Shinto」(神社神道)と区分してはどうかと提案した。また、神道に「教派」があるのは「謎」だとして、「もし神道が根本的・自然的な日本文化の原点だとするならば、教派・教派など必要ないはずだ」と強調。そのうえで「だから私は、教派神道の人に『あなたの教団は神道ですか？』もしそうなら、なぜ宗派・教派が必要ですか？」と質問したい」と話し、神道の定義という議論にも踏み込んだ。

続くモロー氏は、天理教と大本における教派神道への関心の寄せ方に論及した。まず天理教



満員の盛況振りであった第17回国際シンポジウム

については「世界宗教だという自己認識を大本以上に持っている」とし、弾圧を避けるため教



派神道に関与したものの、「神道や仏教とは違うという自己意識は当初からあった。教派神道とはエッセンスが違い、世界宗教としての使命観があると主張した」と説明した。一方の大本については、教派神道との人脈に根ざした歴史があるとし、世界の統一運動を標榜した出口王仁三郎も、諸宗教の総合統一を説いた神道家・川面凡児を早い段階から知って、同類の言葉使いをした可能性もあったとした。

そして、近代日本の宗教システムの中で認定された宗教かどうか「弾圧」や「宗教の自由」の問題にも絡むと論じた。

3人目のハーデカ氏は、教派神道の展開に道を開いた江戸期の「神道講師」の存在を浮き彫りにした。黒住宗忠(黒住教)や井上正鐵(禊教)の教説など、「その思想が受容される過程で、講師の存在は重要だった」と指摘。彼らは吉田家や白川家と緩やかな関わりを保持し、教え

を平易に図式化した「三社託宣」を用い、さらには国学思想を一般にも分かりやすく説き広めたなどとした。具体的には橘三喜、増穂残口、伴部安崇、玉田永教の活動を取り上げ、大祓詞の読誦を奨励し、また神社に對して意識の宣揚を行ったと解説。「その教えは、のちに教派神道と呼ばれる団体の社会的基盤を築き上げるのに重要な役割を果たした」とまとめた。

「政治的な背景はやはり無視できない」**宍野師**

「方便はあっても信仰的信念は強固だった」**木村師**

「神道信仰の多様性、色々なカラーはむしろ自然」**芳村師**

第2部では、教派神道の現場に関わる3師が、自身の教団の歴史と現状を説明し、また今後の展望や取り組みなどについて語った。同時に各氏は、第1部でパイ氏が投げかけた「あなたの教団は神道なのか? もし神道なら、なぜ教派など必要なのか?」という質疑に答えるかたちで、教団の特質、神道との関わりについても話した。

まず宍野師は、江戸期の富士道は仏教色も強く、また幕府から富士講が禁圧を受けた状況もあったと説明。そんな中、明治になって大教院の役職にあった宍野半が、浅間神社の宮司に就いて富士道を知ると、富士講信者の願いを受けて一派特立のた

めに力を傾けたとし、「彼は富士道を復興させるため、時代に即して、神道として形を整えた。その時に、教派というカテゴリーに入った」と解説した。そして、キリスト教の拡大に恐怖を感じた明治政府が対抗上、初期に神道国教化に動いたのを皮切りに、混迷を重ねた宗教政策を辿りつつ、「教派ができたことに関して、当時は維新政府の動きを無視するわけにはいかなかった」と、政治的背景を指



第2部での宗教現場からのレスポンス

摘した。

続く天理教の木村師は、「教祖(中山みき)が警察に拘留されてなお、高齢になっても救済の道を進む中で、周囲の人々がとった方便として「神道」になることがあったとした。そしてその後、神道天理教会として認可を得て布教活動が展開されると、教勢が大きく進展したという側面があるとし、「改変は形式的なもの。おやさまが通りになった手本を拠り所に、信

仰的信念を強固にして、信者は布教に邁進した」と往時に思いを馳せた。

最後に登場した神習教の芳村師(本会常任理事)は、「神道は多神教であり、教派神道に限らず神社神道を眺めてみても、その信仰の形には多様性が認められる。だから外から宗派とかに分けようとすると不自然さを感じるが、いろいろなカラーがあるということは、非常に自然なのではないか」と指摘した。そして、教祖である芳村正乗も「神道家である」との認識を強く考える必要性は感じていなかったと推量したうえで、「神社が儀礼に偏ってしまっている」と批判もした。本来あるべきはずの神と神職の交通、コミュニケーションにこそ、活きた信仰、活きた神道があると考えていた」と強調した。

講演者に対して会場の聴講者や他の講師から鋭い質問が投げかけられ、それが活発な議論を呼んだ。会場で集められたアンケートにもびつりと意見や質問が書き込まれ、本会会員の意識・知識の高さが見て取れた。

閉会挨拶に立ったパイ会長は、各氏の講演をまとめながら、「神道は多様であると再認識すると、じつは教派神道という概念やカテゴリーも、あまり役に立たないものかもしれない、思えてきた」と総括した。



第1部では研究者から発表がなされた



# 欧州宗教学会で初の神道パネル開催

9月17日から21日まで、ベルギーの古都ルーベンのカトリック大学を会場に、2017年度の欧州宗教学会(EASR)の年次大会が開催され、欧州を中心に世界各国から数百人の宗教学者が日頃の研究成果を発表した。神道国際学会では、マイケル・パイ会長と三宅善信理事長らが参加して、20日に『最近の神道研究』と題して初めてのパネルを開催し、EASRにおける神道国際学会の認知度を高めた。

15世紀前半に設立され、中世を代表する哲学者のデジデリウス・エラスムスや世界地図で有名なゲラルドゥス・メルカトルを輩出したルーベン・カトリック大学が2017年度の欧州宗教学会(EASR)年次大会の会場となった。学術大会では、開会式や基調講演を除くと、全部で107のセッションが開催され、それぞれ90分間ずつ各教室に分かれて10から12のセッションが並行して開催された。

マルティン・ルターによる「宗教改革」(1517年)の開始



マイケル・パイ会長による神道パネルの趣旨説明

日本宗教学会とは  
まったく異なる雰囲気

からちようど500年目に当たる年にもかかわらず、そのようなテーマがほとんど話題にならず、また、日本宗教学会のような旧態依然たる学問分野別の学術大会というよりは、「ゲームやSF映画に表現される神」や「人工知能と宗教の行方」のようなポップな話題も研究テーマとして大勢の聴衆を集めていた。

そんな中で、神道国際学会がスポンサーとなったパネル『最近の神道研究』が9月20日の午後、2コマ(3時間)にわたって開催された。今回の神道パネルは、EASRで初めての試みである。最初に、マイケル・パイ会長がこのパネルの趣旨について説明した後、『外からの神道と内からの神道』と題して議論を導入する発表を行った。パイ教授は、「日本の土着信仰である神道に対する外国人研究者の姿勢そのものが、すでに何らかのものが組み込まれてしまっている」という点について留意す



三宅善信理事長による挨拶と神道国際学会の活動紹介

べきである」と指摘した。

続いて、北アリゾナ大学のドゥニャ・エレジエビッチ教授が『能における神祇空間と神仏の相互作用』と題して発表を行った。エレジエビッチ教授は、「中世宗教言説の中で確立された能楽は、神仏や生者と死者等の間に積極的な対話をもたらした。謡曲の『鉄輪』の道行きと『山姥』の「クセ」を分析することによって、能楽が仕手を神仏の枠組みの中で位置づけるために、どういうふうに詩的・地理的暗示を利用したか」について発表

した。また、直前に急病で入院した麗澤大学の岩澤知子教授の発表『神儀礼としての神道』諏訪大社における神話と歴史』が代読されて、質疑応答に移った。最後に、三宅善信理事長が神道国際学会を代表してパネル参加者に謝意を表明し、神道国際学会の活動について広報した。

休憩時間を挟んで、『最近の神道研究』第2部は、南山大学のバク・ヨンジョ非常勤研究員が『日本中世天台仏教の神談論』と題して発表を行った。パク研究員は、中世天台学の総和と言える『溪風拾葉集』を取り上げ、「溪風集では神道における神の〈現れる〉能力を『和光同塵』という用語で表現し、神仏の関係を〈不二〉あるいは〈無礙〉と捉えている」と述べた。

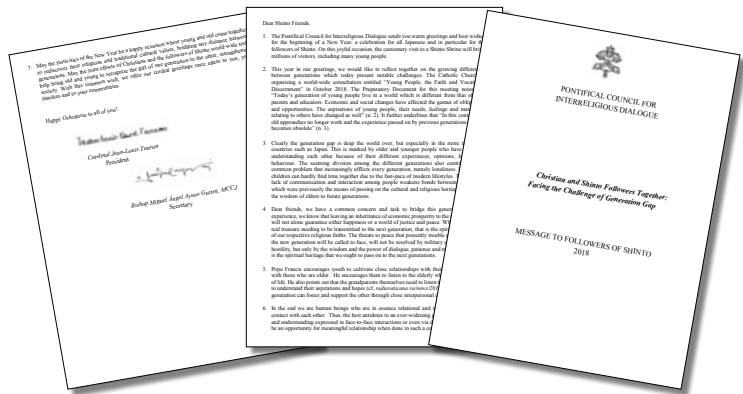
直前に親族の不幸があつて出席できなかったハーバード大学のガエタン・ラポー教授の発表『西洋の学問における中世神道』同一化と本質の狭間で』が代読され、最後に、神道国際学会の理事でもあるオスロ大学のマーク・テューエン教授が、『神道の歴史を記述するということ』と題して発表を行い、フロアを交えてディスカッションを行った。

## 欧州における 神道研究の将来性

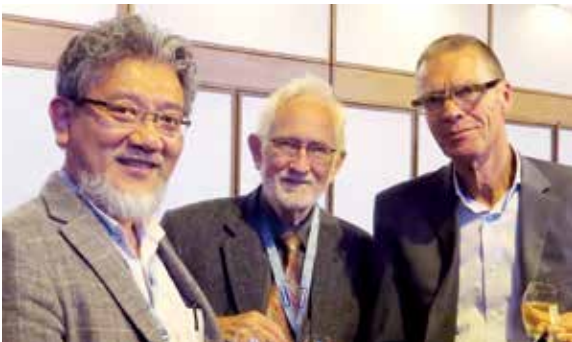
会場には、欧州各地から20代の若手の研究者が大勢参加して

## 教皇庁からの新年メッセージ

バチカン市国の教皇庁諸宗教対話評議会より、本会へ「カトリック教会から神道の皆さまへの新年のごあいさつ」の手紙を頂戴した。現代における「世代間の断絶」を深く憂慮し、この課題に取り組んでいくためには神道に関わるわれわれとキリスト者との連携が不可欠であることを、強く訴えかける内容である。手紙の全文(英語版、日本語版)は本会ホームページに近日中に掲載予定。



おり、研究発表や質疑応答自体は、この学会の公用語である英語で行われた——と言っても、欧州においては、英国人以外にとっては皆「英語は外国語」である——にもかかわらず、休憩



国際宗教学会のティム・ジェンセン会長と共に

時間等には皆、とても流暢な日本語で難しい中世の文献の内容等について情報交換している様子が興味深く、この分野の将来性が見て取れた。

神道国際学会では、今回のパネルで研究発表を行う研究者の先生方に加えて、現在、英国で商業出版が予定されている神道研究に関する本の出版社のジャネット・ジョイス営業部長や、かつて神道国際学会のモスクワ代表部を務めていたモスクワ市立大学のラーダ・フェデアニナ教授らも交えて、神道パネルの前日に、打ち合わせ会ならびに懇親会をルーベ市内のレストランで開催した。なお、2018年度のEASRは、スイスのベルンで開催予定。



## 第4回フィールドワーク・京都3神社めぐり

椎名潤（岐阜女子大学客員教授・神道国際学会監事）

フィールドワーク4回目は、仲秋の名月にあたる平成29年10月4日、京都市内の3神社で実施された。はじめは、御霊信仰の代表的な神社として知られる京都市上京区の御霊神社（小栗栖元徳宮司）へ。

同神社は桓武天皇が794年（延暦13年）、平安京の守り神として、弟の早良親王（のちに崇道天皇の尊号を追贈）の御神霊を祀ったのが始まり。早良親王は、長岡京遷都の中心人物であつた藤原種継が、造営途中で暗殺された事件に関与したとし

て皇太子を廃され、淡路配流の途中、絶食して没した。その後、桓武天皇が早良親王の怨霊に悩まされ続けたことから、平安京遷都と同時に、その御神霊を祭神として御霊神社に祀ったところ、災いが鎮まったという。

以後、皇室の崇敬篤く、また室町幕府、織田・豊臣・徳川の歴代将軍の寄進も多く、いわゆる「御霊信仰」として全国にあまねき、京都府下においては分祀30余社に及ぶ。

また御霊神社付近は細川や山名らの有力守護大名同士が東西に分かれて



御霊神社にて

戦った「応仁の乱」の際に、東の陣が置かれた場所です、すぐ近くに対峙した西の陣（西陣織で有名）があり、今日、上京区・北区一帯、1万数千軒の氏神さまとして、篤い信仰を集めている。

次は、御霊神社から東に

歩いて賀茂川沿いに南下し、高野川との合流地点の出町橋、河合橋を通り、京都市左京区の賀茂御祖神社（下鴨神社Ⅱ新木直人宮司）へ。第1回目のF Wで訪れた上賀茂神社とともに、賀茂神社（賀茂社）と総称される。両社で催す賀茂祭（通称・葵祭）で有名。

賀茂・鴨とは神、御祖とは親のことで、国宝の本殿右に賀茂別雷神（上賀茂神社祭神）の母の玉依姫命、左に玉依姫命の父の賀茂建角身命という親神を祀っている。上賀茂神社とともに奈良時代以前から朝廷の崇敬を受け、平安遷都後はより一層の崇敬を受けるようになり、葵祭で知られる賀茂祭は勅祭とされた。また810年（弘仁元年）以降、約400年にわたって斎院が置かれ、皇女が斎王として賀茂社に奉仕した。

境内には太古の原生林の植生を今に残す貴重な森林「糺の森（ただすのもり）」があり、数々の社殿（55棟が国宝と文化財に指定）とともに世界文化遺産に登録されている。さらに鴨社資料館（秀穂舎）を訪ね、折から開催中の「蒼い眼の神道学者・ポンソンビ博士展」を拝観した。ポンソンビ博士は明治後期に来

日した英国人の神道学者で、昭和天皇の御大礼の際、外国人として唯一、京都御所の建礼門で「列立奉拝」を許された人物。貴重な遺品や蔵書、刊行物、書簡などを見せて頂いた。

最後が京都市東山区の八坂神社（森壽雄宮司）へ。

八坂神社は、元の祭神であつた牛頭天王が祇園精舎の守護神であるとされていたことから、祇園社、祇園神社などと呼ばれていたが、神仏分離令により、現在の八坂神社と改められた。主祭神は、素戔嗚尊と妻の櫛稲田姫命。祇園祭（祇園会）で知られ、素戔嗚尊を祭神とする全国3000社の総本社でもある。

今や京都一の観光地で、この日も外国人を含む多くの参詣者で境内はあふれていた。正式参拝の後、特別の計らいで本殿の裏側まで入ることが許され、神仏習合期のなごりである十一面観音像や「感神院」という扁額を拝見した。

今回のF Wに参加した会員の鈴木康晴さんは「F Wの魅力は一般参観とは違い、正式参拝と宮司さんによる歴史秘話をお聞きできたことで、三宅善信理事長のご配慮に感謝しています」と感想を語った。

なお、今回のF Wは塩谷崇之理事（秩父今宮神社宮司）の地元・秩父の予定。

## 第16回バフチン国際学会 ——『古事記』研究の可能性について

アンダソヴァ・マラル（日本学術振興会外国人特別研究員）

後世に与えた影響という点で20世紀最大の文学理論家とも評されるミハイル・バフチン（1895～1975）。2017年9月6日～10日、上海の復旦大学で第16回バフチン国際学会が開催されました。バフチンはロシア文学研究を出発点としていますが、その理論と思想は文学分野の枠をはるかに超え、哲学、言語学、社会学、教育学などの分野に大きく影響を与え、近年、日本においても柄谷行人や三谷邦明によって注目されてきています。

バフチン国際学会への参加のために世界各国から様々な領域の研究者が100人ほど集まりました。学会のワーキング言語は英語、ロシア語、中国語で、多領域にわたる主題、多言語による発表の場となりました。私は「バフチンのポリフォニー小説の概念と日本古代文学」というテーマで、バフチンの思想によって『古事記』を読み解く可能性について発表しました。発表後は多くの研究者から批判を受け、こうした国際的かつ学際的な学術交流の場の重要性について考えさせられました。今後も『古事記』研究の国際化に向けて努力していきたいです。



第16回バフチン国際学会に各国から集まった研究者たち





# 賀茂御祖神社

マイケル・パイ（マールブルク大学名誉教授）

京都で最も人気のある神社のひとつである下鴨神社を訪れる者が、最初に目にする建築物が楼門、または赤楼門として知られる巨大な門であり、今回の歴史絵葉書シリーズではこの楼門をご紹介します。

下鴨神社の正式な名前は賀茂御祖神社といい、社史からは、その創建が非常に古いことがわかります。また、『続日本紀』には下鴨神社の葵祭は文武天皇 2 年（698 年）から祝われていると記されています。本殿は、西御本宮と東御本宮から成り、そのどちらもが国宝に指定されています。そして、さまざまな時代に建てられた多くの建築物が重要文化財に登録されています。それらの中でも、この巨大な楼門は寛永 5 年（1628 年）に建てられ、時々塗りなおしを中心とする修復を重ねてきましたが、今も創建当時の姿を保っているのです。

この絵葉書は、下鴨神社のほど近くに居を構えていた池田遙邨<sup>ようそん</sup>の日本画をもとに作られています。その原画は昭和 2 年（1927 年）の作品で、現在、下鴨神社内に保存されており、この絵葉書もその後ほどなく作られたものだと考えられます。絵葉書の文字表記が右から左への横書きになっていることから、戦前のものであることがわかります。神社の風景は大胆に省略され、彼方に二つの本宮が見えるのみで、これらの要素は日本美術の伝統である雲のように見える色彩の流れによって分けられています。この日本画スタイルというのは、夢の中の現実のように思えたのでしょう。



## 連載 神道 DNA

# 『新しい時代をどう迎えるか』

金光教尾尾教会 総長／(株)レルネット代表 三宅善信

「<sup>つちのえいぬ</sup>戊戌」の新年を迎えた。私事になるが、私はこの夏、還暦を迎える。考えてみれば、昭和の御代を 30 年間、平成の御代を 30 年間、生かさせていただいたことになる。来春（2019 年）には、今上陛下がご譲位あそばされることが決まっているので、この上はなんとか頑張って、「あと 30 年は現役でいよう」と誓った。

戊戌の年と言え、120 年前（1898 年）には、お隣の清帝国では、日本の明治維新に刺激を受けて、光緒帝の全面的な支持の下、若手官僚の康有为や梁啓超らが中心となって、憲法の制定や議会制度の導入を目指す「戊戌の変法」と呼ばれる政治改革がなされた。しかし、この改革も、宮廷内に隠然たる勢力を有する西太后をはじめ榮禄や袁世凱らの守旧派によって、わずか百日間で挫折させられてしまった。

有史以来「アジアの大国」であり続けた中国は、この時、近代化、民主化のチャンスを見失ってしまった。もちろん、この「戊戌の変法」に先だって、清国も明治日本の「和魂洋才」や「富国強兵」と同趣旨の「中体西用」や「自強運動」を説いてきた。しかしながら、日本の

「和魂洋才」と清国の「中体西用」とでは、一見似ているようで、その本質はまったく異なっていると言える。

「和魂洋才」の「魂」とは、あくまで精神的なもので、具体的な形がないので、日本古来の精神を大切にしつつ西洋の技術を受け入れ、両者を調和させ発展させていくということができた。つまり、近代化に不可欠な西洋諸国をモデルにした憲法の制定や議会制度を導入した上での政治改革であった。このモデルは、明治維新の千年以上前の遣隋使・遣唐使の時代でも、大陸から仏教を受け入れながら古来の神祇崇拝を残し、易姓革命の儒教的国家統治体制を取り入れながら万世一系の天皇制を護持したことからも、実証実験済みであった。

一方、「中体西用」の「体」とは、中国的な儒教の考え方と体制（君主独裁制）をそのままに表面のみ（技術のみ）を受け入れることであり、そのために破綻が生じてしまった。明治の近代化とは、長年続いた幕藩体制を担った諸大名と、これを武力で打破した薩長勢力の両方に既得権益を放棄させることによって、新しい近

代国民国家を成立させることであったが、清帝国では、結局、最高権力者が自らの権力を制限することを拒んだために、権力の自己吟味が疎かになってしまい、その後、欧米列強の後塵を拝することになってしまったのである。

問題は、その中国人の政治的体質が、21 世紀の現代になっても、自画自賛しかできない共産党一党独裁体制としてかの国に蔓延<sup>はびこ</sup>っていることである。いくら、経済的に発展しようとも、また、軍事的に強大になろうとも、中国のモデルが世界のスタンダードになることはあり得ない。それどころか、国家が発展すればするほど、強大になればなるほど、その矛盾が蓄積され、自己崩壊の危険性が高まるのである。

キリストの言葉にも「新しいぶどう酒を古い革袋に入れてはいけない。そんなことをすれば革袋が破れて酒が漏れるし、袋もだめになる。新しいぶどう酒は新しい革袋に入れよ」（『マタイによる福音書』第 9 章第 1 節）という教えがある。神道では、20 年に 1 度新しい社殿にそっくり建て替える伊勢の神宮の式年遷宮をはじめ、多くの神社で定期的に社殿が建て替えられたり、神輿や神具等の装飾を改めたり、常に、その時代その時代の鋭気を神威に取り込んで行こうとしているのである。あと一年少しで、平成の御代も終わりを告げる。われわれはどのようにして新しい時代を迎えるべきであろうか…。





## 神社巡り⑩

鈴木岩弓

東北大学 総長特命教授

しおがま

## 鹽竈神社

●宮城県塩竈市一森山1-1

地元の人々から「しおがまさん」という名で親しく呼ばれる鹽竈神社は、宮城県塩竈市の小高い山上に鎮座する陸奥国一之宮、庶民のみならず、朝廷や武家からも広く信仰を集めてきた古社である。御祭神は三神からなり、別宮に鹽土老翁神、左宮に武甕槌神、右宮に経津主神をお祀りする。17世紀末の『鹽竈神社縁起』によるなら、鹽土老翁神を先導にした武甕槌神と経津主神が東北地方の平定を終えて凱旋した際、この地に三神が祀られたことがその端緒とされる。その後武甕槌神と経津主神は、それぞれ鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）と香取神宮（千葉県香取市）へと遷り、鹽土老翁神はこの地に留まった。そのため現在は主祭神の鹽土老翁神は別宮に、左宮



境内から松島湾を望む

に武甕槌神、右宮に経津主神が祀られている。唐門を入って正面に左宮と右宮があり、別宮は右90度向いたところにある。一般に「別宮」の語は、本宮に準じて崇敬される社を指すが、ここでは別宮が一番格が高い。「特別な宮」という意味をもった「別宮」だからである。運が良いと、別宮前に置かれた「献魚台」の上に大きなマグロが供えられているのを見ることができる。

境内には、『延喜式』に名神大社として記載されていた志波彦神社が明治7年に遷祠され、戦前までは両社併せて国幣中社に列せられていたが、現在では神社本庁の別表神社である。志波彦神社の入り口近くからは松島湾を眺望でき、その視線手前にある鹽竈神社博物館では、国指定重文の太刀など神社に関わる歴史資料が展示されている他、2階では製塩に関する珍しい資料をみることができる。

三神のご神徳に従い、海上安全・大漁満足・武運長久・製塩守護が古くから知られていたが、人の生死が潮の満ち引きに関係し、海が「産み」に通じることから安産守護の信仰も広く集めている。この神社の御分霊は全国に及ぶが、東北地方から茨城県の太平洋岸、静岡県から愛知県、香川県を中心とした瀬戸内海沿岸部や九州の島嶼部にも見られ、最南端は種子島まで広がる。

鹽竈神社の祭礼の中で最大のものは7月10日の「例祭」で、別宮、左右宮本殿内の御神幣などを持ち出して、境内樓門前で振って国家平安を祈念する。また3月10日の「帆手祭」、7月の海の日「みなと祭」では、1tの大型神輿が市内を巡幸する。また製塩との関連では塩竈市本町に鎮座する境外末社の御釜神社には、鹽土老翁神が用いたとされる鉄製平釜が納められており、毎年7月4日から6日にかけて「藻



タラヨウの葉に書かれた祈り

刈神事」「水替神事」「藻塩焼神事」が斎行される。神社境内には、神道色が薄い民間信仰的な祈りの対象がいくつか見られる。一般参詣者が気付かずに通り過ぎるような所にあるのだが、まずは「疣神さま」。この神様が鎮座するのは、丁度、鹽竈神社と志波彦神社の間にある、何の変哲も無い道の先を左に曲がったところ。そこに小さな池があり、ケヤキの古木が倒れ込むように生えている。箸の先にこの水を付けて撫でると、疣が取れると言うのである。脇には賽銭箱があり、その上には多くの箸が供えられている。ここに祈って疣が取れた人が、お礼参りに来た際に「ペーがえし（倍返し）」したからである。またそのすぐ横にあるタラヨウの木も、人々の祈りを集めている。実は鹽竈神社には県指定天然記念物のタラヨウが拝殿近くにあるが、それとは別でこちらのタラヨウは無名である。県指定のものは北限のタラヨウだそうだが、実際、どちらが北が微妙な位置にある。その葉に文字を書くとき葉の傷が変色することから「葉書」となったと言われ、タラヨウは「郵便局の木」とされてもいる。ここでは「祈願内容を葉に書いて祈り、その葉が落葉すると願いが叶う」と言われている。木の下に立って見上げると、いつ行っても、多くの葉に人々の祈りが書かれているのを見ることができる。現代日本の神社における信仰の実態として、興味深い。

## 話題のこの人

能楽と宗教儀礼の相互性を探る

ドウニャ・イエレシエビツチ博士

米国・北アリゾナ大学教授



9月に開催された欧州宗教学会の本会パネル（詳細は3頁参照）の講師の一人に、その研究について話を伺った。

能楽は中世日本における

仏・神の融合世界を

反映している

中世日本の芸能に見られる「宗教的性格」について、とくに能楽に内在する儀礼的な要素に着眼しつつ、究明に取り組んでいる。

能と宗教が密接な関係を有することについては、これまでも多くの学者がアプローチを試み、解釈を施してきたが、「その宗教的な側面というのは、ある限られた一つのモチーフに拠るもの——というふうに限定することはできません」とし、観点の多様さを力説する。

そして「仏教の、また神信仰の、宗教的シンボルや語りなど、さまざまな影響が入り込み、しかもそれらは、互いに調和、融合している。まさに中世の日本社会における神・仏が混合した宗教的な性格そのものを反映していると思います」と強調して

いる。

生者と死者の対話、

儀礼者と儀礼対象の重複

能の世界の多彩な相互性

また、観る者が受動する演劇的なパフォーマンスというところに止まらず、「能の世界には、仏、阿弥陀、菩薩、神との対話があり、あるいは生者と死者との対話がある」。そうした相互性がもたらす単純でない性格が存在するのです」と話し、その奥深さを捉えようと意欲をみせる。

さらに、神信仰と仏説が結合された「儀式的言説」でもあるとの想定のもと、制作者と観衆の視点を融合させながら、能楽の特徴に対する新たな検討への試行を続けている。

そうした、能の謡曲に分析を加える探求過程において、珍しい儀礼構造の存在に気づいたという。「たとえば『鉄輪』や『道成寺』など、いわゆる〈鬼物〉というカテゴリーに属する謡曲において、儀礼者と、儀礼の対象は、不思議な重複を見せていることが分かりました」。

シテも、儀礼者として宗教バ

フォーマンスのさまざまな役割を担いながら、補完性（いわばオルタナティブ）を発揮する。そうした点にも、能における宗教要素の「調和」や「融合」、「相互作用」などを垣間見ることができると考察している。

前近代の能楽と

現代のホラー映画

果たしてその連続性は？

旧ユーゴスラビアのベオグラード大学を卒業後、アメリカのイリノイ大学大学院に進み、論文「魅惑（みわく）の世界の儀礼——中世日本宗教における能楽」で博士号を取得した。現在は北アリゾナ大学教授。

大学時代に日本語・日本文学を専攻する中で日本神話にも関心を持ったという。大学院で、日本神話とスラブ神話の比較研究を推進。日本の伝統演劇や芸能、とくに能楽に興味を寄せた。今後は、前近代の能楽に関する知見を基礎に、現代のホラー映画についても分析し、「そこに歴史を超えた宗教儀礼的な文脈の連続性がうかがえるか、探ってみたい」と話した。



# 現代思想2017年2月臨時増刊号 総特集＝神道を考える

青土社、2016年12月28日刊、310ページ、ISBN 978-4-7917-1336-3、本体2000円＋税

評／斎藤英喜(佛教大学教授)



執筆者のひとりであり、「討議」の司会者でもあるので、我田引水になってしまつて気が引けるが、神道研究の最新成果として、やはりこの一冊は紹介させていただきたい。

あらためて『現代思想』といえば、左派系の論壇をリードし、またポスト・モダンの思想を牽引した雑誌として知られていよう。そんな『現代思想』が、なぜ、いま「神道」の特集をしたのか。その事実をもってしても、「神道」をめぐる学的状況の変化ということが見えてこよう。

まず注目されるのは、本誌の巻頭を飾るマーク・テーウエン「神道の概念化とユートピア」をはじめ、ファビオ・ランベッリ「神道、あるいはシニフィアンの宗教」、アングソヴァ・マラル「古事記のなかの神武天皇」などオランダ、イタリア、カザフスタンなど海外の研究者の論文である。彼らの論考は、神道は日本人にしか理解できないとか、民族固有の伝統といった認識を突き崩し、グローバルな視点から見直されるべき「神道」の姿を教えてくれよう。

次に重要なのは、伊藤聡「吉田兼俱の「神道」論」、山本ひろ子「中世の諏訪」、吉田唯「中世神道研究の現在」、彌永信美「八百万の神達＝「梵天帝釈、無量の天子…」?」、小川豊生「反転する神学」など中世神道研究の最新の成果が繰りひろげられているところだ。近年の中世神道研究の進展が、従来の「神道」をめぐる認識をひっくりかえし、仏教との関係のなかでこそ「神道」なるものが生み出されたこと、そこに近代の「国家神道」とはまったく違う「神道」の豊かな可能性が示されていることは、すでに研究者のあいだでは常識となりつつあろう。また中世神道研究の深化とリンクすることで、近世国学の捉えなおしを提示する山下久夫「本居宣長と平田篤胤は神道をいかに再構築したか」は、今後の神道史の研究の広がりを教えてくれるものだろう。

そうした神道研究のニューウェーブを『現代思想』の読者にむけて発信しえたことは、本誌のなによりの成果とっていい。『現代思想』の常連読者から、神道研究の奥深さと広がりへの驚きの声があがったとは、担当編集者から直接聞いたところだ。

以上のような論考は、これまでの「神道」にたいする認識が、いかに近代が作ってきたものであったかを具体的な事例を通して明かにしてくれる。しかしだからといって、「近代」の神道をすべて「国家神道」という一元的な見方で切り捨ててすることはできないだろう。

本誌のもうひとつの眼目は、近代の「神道」の歴史をも、豊かに広げていくための方向性が提起されたことにある。たとえば安藤礼二「王仁三郎論序説」、安藤と鎌田東二との対談「隠された神々の世界を求めて」は、近代の「異端」神道の可能性を近代思想史全体からのあぶり出し、あるいは中世神道研究者の伊藤聡を交えて、近代の国体論研究を刷新した昆野伸幸、天理教など新宗教研究の若手のホープ永岡崇、さらに『記』『紀』の神話解釈史から神道の見直しを進める斎藤による討議「歴史としての神道」は、「近代」という時代の深層に蠢く、もうひとつの「神道」の可能性を探る試みとなっている。そうしたなかで、あらためて問われたのが、近代神道史のなかで折口信夫をどう読むか、という課題であった。国文学、民俗学のステレオタイプ化した「折口学」とは異なる、神道学者としての折口信夫の読み直しは、「宗教としての神道」の今後の行方を考えるうえで不可欠な作業となることが、『現代思想』の誌上で議論されたのだ。本誌によって、神道研究の新しい動向が展望できることは間違いないだろう。

## 神道と妖怪（後編）

今井秀和（国際日本文化研究センター 機関研究員）

月岡芳年『百器夜行』  
（国際日本文化研究センター蔵）



「神道と妖怪」前編では、貧乏神のように「〇〇神」と名の付くものであっても、必ずしも善なる存在ばかりではなく、人にマイナスの要素を及ぼす妖怪的なものもいることを確認しました。一見、無関係にも感じられる神道と妖怪ですが、実は深いところで繋がりを持っていることが確認できたと思います。

しかしながら、河童や鬼などのいわゆる「妖怪」に視線を写すと、神道的な要素を持つものよりも、仏教的な要素を持つものの方が多くことに気付かされます。たとえば寺院ゆかりの妖怪や寺院に出没する妖怪の説話・伝承は各地に多くあり、元興寺と書いて「がごぜ」と読ませる妖怪すらいます。

また、本来は僧侶を指す呼称であった「坊主」や「小僧」などの単語を名前に含む妖怪もたくさんいます。例をあげれば、一つ目小僧に青坊主、見越し入道に海座頭や海和尚などなど、枚挙に暇がありません。さらに、各地に伝わる「化け地蔵」など、本来は人を救うはずの仏像が妖怪化する、という話もあります。

中世から江戸期にかけて描かれた百鬼夜行絵巻や、その影響を受けた江戸期の浮世絵などには、木魚や銅鑼など、仏具が妖怪化したものも数多く

描かれています。これらの絵画作品は、ときに仏教の教えを含んでいることもありますが、単純に、寺院や仏像、仏具といった、古色を帯びた霊妙なイメージを拝借しただけのものの方が多くです。

百鬼夜行絵巻などに描かれる器物の妖怪は、「付喪神」（つくもがみ）とも呼ばれます。今日的な感覚で言えば妖怪なのに「〇〇神」という名で呼ばれているという事実は、前回確認した通り、かつては日本における「神」の概念が広がったことを端的に示しています。

さて、寺院・僧侶・仏具などの仏教的なイメージを宿した妖怪に比べると、神社・神職・神具などの神道的なイメージを宿したものは、ぐっと数が少ないと言ってよいでしょう。しかし、神道的なイメージを持つ妖怪がいなかったわけではありません。たとえば前述の百鬼夜行絵巻の諸本には、神道で用いられる祭具の「幣帛」を持った骸骨や、鈴を持った巫女姿の鶴など、神道的な要素を持った妖怪たちも描かれています。

江戸期の絵師である鳥山石燕が描いた妖怪画集『画図百鬼夜行』シリーズは、伝統的な妖怪から石燕による創作に至るまで、実にたくさんの妖怪を描いたものですが、その中には百鬼夜行絵巻

に由来する仏具の妖怪のほか、幣帛を持った神職姿の「幣六」、巫女と鈴のイメージを混ぜた「鈴彦姫」、神鏡の姿をした「雲外鏡」など、神具の妖怪も含まれています。おどろ髪を振り乱した妖怪「おとし」は、理由は定かではありませんが、鳥居に乗った姿で描かれています。

また、月岡芳年による浮世絵『百器夜行』には、幣六や鈴彦姫によく似た姿を見出すことができます（図）。この絵は十四体の付喪神を描いていますが、実は、その全てが鳥山石燕『画図百鬼夜行』シリーズから借用したもののなのです。

このように江戸期の絵画においては、神社や神具、そして神職のイメージすらも妖怪化してしまうのです。江戸期に戯画化された「神道」イメージを有した妖怪たちや、古来、日本人の日常に潜んでいた悪しき神々について考えることは、神道それ自体について考える際にも、きっと重要な視点を提供してくれるに違いありません。



三宅善信理事長

8月3～4日 比叡山宗教サミット30周年記念式典・世界平和祈りの集会に（芳村正徳理事と共に）列席。  
8月25～30日 中国雲南省の少数民族を視察。北京で中国政治協商会議全国委員会の馬彪副主席らと会談。国家宗教局を訪問。



中国の宗教政策担当幹部らと会合

9月18～20日 ベルギーのルーベンカトリック大学で開催された欧州宗教学会に（マイケル・パイ会長、マーク・テューエン理事と共に）出席。  
10月30～31日 岩手県の遠野地方で民俗信仰について学ぶ（鈴木本弓理事と共に）フィールドワークを実施。  
11月28日 黒住教七代教主就任祝賀会に（芳村正徳理事と共に）

に列席。

12月7日 関西国連協会と大阪日華親善協会の共催講演会で、新型インフルエンザの脅威について講演。



新型インフルエンザの脅威について講演

マイケル・パイ会長

9月17日から21日 ルーベン（ベルギー）にて開催されたEuropean Association for the Study of Religions (EASR)の年次会議において、ISSAとして各国より講師を招待し、二つのパネルを出展した。最近の情勢として、いかに神道が注目されているのかを実感できる素晴らしい機会となった。  
10月4日 京都にて開催された第4回フィールドワークに参加。  
11月11日 第17回国際神道シンポジウム『教派神道の謎と魅力』において、導入となる講演を行った。また、本シンポジウムの研究者による発表部門をコーディネートし、成功をおさめる



『聖徳太子思想の中心にあった神道』を読んで

佐渡 睦（神道国際学会会員）

この『聖徳太子思想の中心にあった神道』というタイトルを目にした時に私の中でも、聖徳太子と言えは、「仏教者のイメージ」で捉えており、聖徳太子から「神道」という言葉がイメージとして湧いて出てくる事がありました。「和を以て貴しとなす」の意味が、儒教理論の体制を取りながらも、本当は「和」の価値観を説いたものだという事を、この本から学びました。一般的には「仏教思想の日本への紹介者」として認識されている聖徳太子が「皇祖皇宗を敬い、天神地祇を祀る神道的な皇太子そのものであった」との文面もさることながら、聖徳宗総本山法隆寺管長の太田玄妙師に「和魂のお話をお伺いしよう」から始まるこの対談はとても興味深いものでした。

お知らせ

第20回国際神道セミナー『海と神道』

平成30年3月16日（金）に、社員総会と第20回国際神道セミナーを都内にて開催いたします。社員総会では、例年同様に前年度活動報告および翌年度の活動計画について提議し、総会終了後、国際神道セミナーでは『海と神道』をテーマにいたします。

本土から島嶼部へと連なる神社の場合、より遠方の島へ行くほど本土側よりも神社の歴史が深くなるのはなぜなのか。また、日本は古来より、「水田稲作を中心とした農耕文化である」と言われているにも関わらず、歴史の深い神社には、海や海運に関わる社が多いのはなぜなのか……。これらの疑問には現代の神道の常識だけでは応えることができません。本セミナーでは、九州大学のリンジー・デウィット研究員（宗像国際研究会メンバー）を招き、本会所属の研究者とともにこれらの疑問に挑戦していきたいと思ひます。

第5回フィールドワーク in 秩父

平成30年4月9日（月）埼玉県秩父地方にて第5回フィールドワークを開催いたします。2016年に世界遺産に登録された秩父夜祭りや武甲山と数多くの神社を中心とする信仰、そして札所巡りや地場産業との結びつきに支えられる社など、その独特の信仰について学ぶ機会として企画しました。（訪問予定：秩父神社〔正式参拝〕、秩父まつり会館、秩父今宮神社、有恒神社、札所数箇所など）

※両行事とも、開催概要やお申込み方法につきましては、会員各位に改めてご案内いたしますので、ふるってご参加ください。

幸運を得た。

現在、今年のEASRのISSAパネル出展の準備、また4月の秩父での第5回フィールドワークの準備に携わりながら、the international journal History of ReligionsのHelen Hardacre教授のSHINTO A Historyの書評を執筆中。

新刊 紹介

『日本の神様解剖図鑑』

平藤 喜久子、エクスナレッジ 2017年12月、1600円（税別）

『皇后考』

原武史、講談社、2017年12月、1850円（税別）

神道国際学会からのお知らせ

- ◎いつも社報や刊行物をお送りください、ありがとうございます。
- ◎ご入会のご案内：神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。

|                |           |
|----------------|-----------|
| 一般会員（年会費）      | 3,000円    |
| 賛助会員（年会費）      | 10,000円   |
| （法人会員（年会費）     | 100,000円） |
| 特別賛助会員（個人・一時金） | 30,000円   |
| 特別賛助会員（団体・一時金） | 500,000円  |

NPO法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F  
Tel. 03-6805-7729 Fax. 03-6805-7769 info@shintou.org

編集後記

平成も30年という節目を迎えましたが、皆様はどのような新しい年を迎えになられたでしょうか。昨年、特別顧問に就任いただいたケアリー卿より新春にあたってメッセージをいただきました。また、今号では秋の国際シンポジウムや欧州での宗教学会、そして京都でのフィールドワークなど、本会の様々な活動をご紹介します。今年も多くの会員の皆様にご参加いただき、その際には、ご感想やレポートを神道フォーラムにお寄せいただきたいと思います。『話題のこの人』では欧州宗教学会の講師を、『歴史絵巻』ではフィールドワーク訪問先を、それぞれ取り上げておりますので、参加された方には記憶を新たにしてください。この他にも多彩な記事を掲載しておりますのでお楽しみください。